

原発 ゼロ にむかって

2012年9月26日 No.34

<http://www.tokyominiren.gr.jp/>

編集・発行／東京民医連事務局 tel : 03-5978-2741 fax : 03-5978-2865 mail : sien@tokyominiren.gr.jp

見たままを多くの人に語ってほしい

健生会教育委員会
福島日帰り研修

9月11日。震災から一年半になるこの日、健生会教育委員会は、制度研修の一環として「福島日帰り研修」を実施した。参加者12人。朝6時に中型バスで出発、現地滞在5時間、夜7時に帰着という強行軍だったが、「全体的に大変充実」「期待して参加したが期待以上。大変意義ある時間」「本当に勉強になった」などの感想が寄せられた。

今回の企画では、小名浜生協病院の國井事務長と浜通り医療生協の工藤さんが全面的に支援して下さった。



広野駅前。「戻ってきている人は2割程度」右端が國井事務長。

8月10日から「20km圏内」に入ることができるようになったおかげで、“被災者に寄りそう医療”にも登場した早川篤雄、伊東達也両氏から、楢葉町の宝鏡寺でお話を伺うことができた。「時が止まっていた」「家も田畑もあるのに生気がない」楢葉町の様子に、これまで経験したこともない異様さを感じた。その後、広野町から海岸沿いを南下。甚大な津波被害を実感させられた。津波と放射能という二重の被害をうけて、いまだに住民のほとんどが戻って来られない実態を見て、「政府に対する怒り」「東電の責任の重大さ」を感じないわけにはいかなかった。

「福島原発の電気が都会に送られていた」ことや、「福島産」だと都会では値が付かない状況、放射能を避けて福島を去る人、それでも残る人、残らざるをえない人。現地の人々の複雑な気持ちが工藤さんの話から読み取れた。「いろいろな判断があります。私たちは“全方位”で被災者の決断を支援します」という言葉に「支援のあり方」を教わった。「私は原発に反対してきたが、それでも、『地震にも津波にも原発は大丈夫だったじゃないか』と推進派に言ってほしかった」と工藤さんが目頭を押さえた場面を一生忘れないだろう。

あの日から一年半が過ぎた。私たちは今、いったい何をすべきなのか、何ができるのか。——「“見たまま”を多くの人に語ってください。」宝鏡寺での伊東さんの言葉が思い出された。(健生会教育委員会 奥野衛)



工藤さん

【参加者の感想文より(抜粋)】

楢葉町に入った頃から、動物さえ見ることがなく、時が止まったような感じであった。原発事故は、夫婦や家族、仲間、集落さえバラバラにして、人間の心までズタズタにしてしまう恐ろしいものであり、これからも原発の学習をして、被災地の支援活動に参加するつもりです。(事務)



宝鏡寺、外の線量は0.8μSv/h



震災当日の津波は砂浜の見張り台を飲み込んで襲ってきたという

住民はどこにも見えない。時折すれ違う車列に防護服を着込んだ作業員が乗っているのを見て、ここが被災地なのだと思えて実感する。いわき市の津波被害。中学校に積まれた瓦礫。家の残骸は撤去され、基礎が放置されたまま草に覆われて何も無い広大な空き地のようにになっている。私は原発に対し絶対に反対という意見をもっているわけではないが、この光景を見ると、原発さえなければ悲しむ人はもっと少なかったらと考えてしまう。(看護師)

現地の人々は力強く、明るく、前に進んでいっていました。悲しんだり、怒ったりするだけでなく、未来のためにできることに取り組んでいました。そんな姿に、私の方が力をもらった気がします。今回の研修で見たこと、聞いたこと、学んだことをたくさんの人に伝えていくこと、忘れずに考えていくことで、少しでも力になれたらと思いました。(セラピスト)